

あなたのスキルは社会に役立つ

2011年3月11日の東日本大震災発生の直後に発足したHack For Japanと「市民が主体となって自分たちの街の課題を技術で解決するコミュニティ作り支援」を掲げるCode for Japanのメンバーから、防災や減災、地域の活性化や課題解決、そして人材育成など、「エンジニアができる社会貢献」をテーマにした記事をお届けします。

第90回

「エフスタ!!」流、エンジニアのためのワークライフバランス勉強会

● Hack for japan スタッフ

鎌田 篤慎(かまた しのり) [Twitter](#) @4niruddha

我々、Hack For Japanではこれまでの復興支援に関わる活動を通じて、東北地方で頑張るさまざまなITエンジニアたちと出会い、その人たちが活動するコミュニティとつながっています。今月号では福島県のITスキルアップ応援コミュニティ「エフスタ!!」が県外で行っている活動の中で、2019年3月16日に開催された勉強会「エフスタ!! TOKYO」の様子をレポートします。変化の激しい現代におけるエンジニアのためのワークライフバランスのヒントや、福島原発問題を抱える中でも徐々に若い芽が育ちつつある様子を、福島のエンジニア・学生らと共に行われた活動の中からお伝えしたいと思います。

「エフスタ!!」とは

はじめて「エフスタ!!^{※1}」というコミュニティを目にする読者の方のために、簡単にこのコミュニティ

注1 <http://efsta.com/>

について紹介しようと思います。

「エフスタ!!」ではIT業界で働く人たちが楽しんで仕事ができるよう身の回りのIT業界を変えたい、夢と希望を持った技術者を育てたい、そのために教育に力を注ぎたいという考えから立ち上げられました。

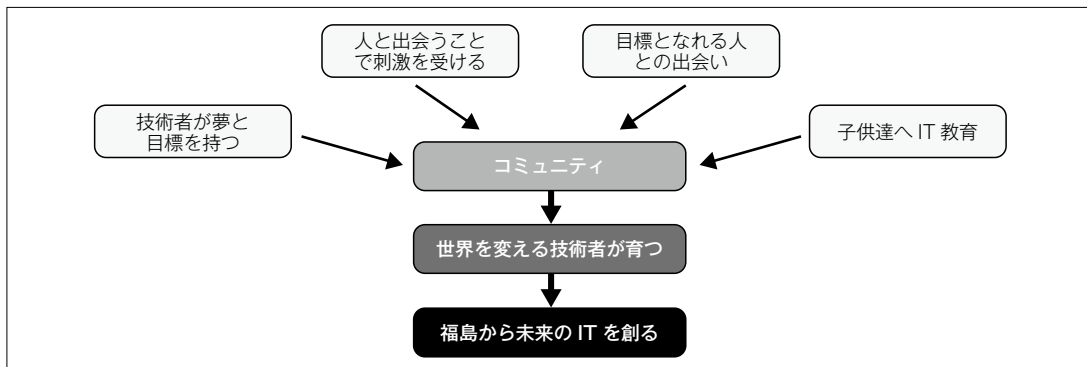
福島のITが変われば、夢と希望をもった技術者が増える。そうすることで、世界を変える技術者がやがて誕生する(図1)。そのような理念を実現するためのきっかけ作りの場として「エフスタ!!」というコミュニティは運営されています。

また、「エフスタ!!」の語源は「福島(F)のスタイルを変える」から「エフスタイル」に略され、語呂の良さから今の「エフスタ!!」というコミュニティ名に落ち着いたそうです。

エフスタ流 ワークライフバランス

さて、今回紹介する「エフスタ!!TOKYO」では「エ

▼ 図1 「エフスタ!!」活動理念



フスタ流ワークライフバランス」と題して、世の中の働き方が変化していく中でエンジニアはどのようなワークライフバランスを取っていけば良いのか、というテーマで勉強会を行いました。東京、福島、北海道の各会場の参加者が、日本を代表するエンジニアと一緒に考えてみました。また、各会場には幼い子どもから、中高生も参加しており、まさにワークライフバランスを考えるうえで多様な視点が得られる場となりました。

自分をコンテンツ(データ)化する時代

はじめに、外資系テクノロジー企業に勤めながら幅広いテクノロジー領域の啓発活動を行う、澤円さんによる講演がありました。澤さんはほかにもサイバー犯罪の防止に取り組んだり、スタートアップの顧問・アドバイザを兼任したりと、さまざまな活動を行っています。これまでの働き方から得たヒントをもとに、ワークライフバランスの考え方を「ボンコツエンジニアのワークとライフの混ざった生き方」と題して語っていただきました。

澤さんはプレゼンテーションを年間287回も行うなど、世の中から言えばブラックな仕事と言われるような驚異的なボリュームの仕事をこなしています。澤さんはそうした状況を伝えつつ、今回のテーマである「ワークライフバランス」とは、何をもちてバランスというのか? という点を問いかけました。

はじめに、ワークライフバランスを考えるうえでの時代の変化が紹介されました。まず、前提として過去のコンピュータの時代(ハードウェアの時代)か

ら、ITの時代(ソフトウェアの時代)にシフトし、現在はデジタルの時代(データの時代)に急速に移りつつあります。こうしたデジタルの時代にシフトしていく現代の流れに対応することはデジタルトランスフォーメーションと呼ばれ、現代で働く我々はこうした変化を自覚する必要があります。しかし、デジタル時代に自覚的になると一口で言っても、実際には何が起きているのでしょうか? その点について、澤さんはさまざまな角度からのデータと事例を紹介。The New York Times誌の1週間分のデータ量は18世紀に生きた人が一生のうちに触れるデータ量と同じであったり、世の中に存在するデータの9割は直近2年間で生み出されたものであったりといった話題を通じて、会場の参加者の理解を促します。あらゆるものがデータ化される現代は、私達が働く環境をデータドリブンなものにしていきます。

また、澤さんは参加者に「自分をコンテンツ化(データ化)しよう」と訴えかけます。たとえば、Eコマースで何か商品を買おうとしたとき、人はブラウザに映し出される画像や商品説明のテキストなどのデータを元に購入するか、しないかを判断します。つまり、コンテンツとしてデータになっていなければ、この世に存在していないのと同じようなことになってしまうというのが、澤さんがデジタルの時代に意識すべきこととして強調していたことでした。

挫折と失敗から学ぶ ワークライフバランス

澤さんは映画『007』の中でジェームズ・ボンドの秘密兵器を開発する研究者「Q」に憧れ、文系の大学生だったにもかかわらずエンジニアの道を目指したそうです。結果として、COBOLや汎用機などを扱うSIerのシステムエンジニアとして就職したものの、大学で学んできたわけでもなかったコンピュータを扱う仕事には非常に苦勞されたそうです。そうしたことから、澤さんは自らの過去を「ボンコツエンジニア」と称してお話されていたのですが、そんな澤さんに転機が訪れます。

インターネットが世の中に出てきたとき、非常に強い関心を抱いた澤さんは、当時注目を集めていた

▼写真1 澤円さんによる講演の様子



コンピュータメーカーであるGATEWAY2000から、自腹で高額のパソコンを購入し、四苦八苦しながらインターネットの理解を深め、使いこなせるようになったといいます。そうこうするうちに、エンジニアの中ではプログラミングなどがわからなかった立場から、インターネットならわかる立場に変わっていきます。そして、もともとわからない立場だったからこそ、澤さんがインターネットを理解していく過程の中で、わからない人でも伝わる説明ができるようになっていきます。そうした人々に伝わる説明が重宝され、今のキャリアを支えているとのことでした。

そうしたキャリアを築くうえで大切だった姿勢もお話いただきました。1つはあきらめの悪さ。愚直に継続していく中で結果として身になったとのことでした。もう1つが前進すること。誰しものが挫折や失敗はしたくないものですが、動かなければ前に進みません。チャレンジした結果の挫折というのは、人よりも前に進んでいる証拠として、会場の参加者に挫折や失敗を恐れないう澤さんは訴えかけます。そして、挫折や失敗から学ぶのがワークライフバランスのとり方にもつながっていくとして、挫折や失敗を恐れないうための考え方をいくつか伝えてくれました。

また、シリコンバレーのマインドセットについてのお話もありました。シリコンバレーで起業を志す人たちの間で軽蔑される考えがあり、それは「起業してお金持ちになりたい」という考え方です。こうした考え方は投資家たちからは成果を産まない人物として、投資対象の候補からも外され、周囲からも認められないのだそうです。それでは、認められ、リスペクトされる考え方とはなんのでしょうか？澤さんはそれを世の中を本気でおもしろい世界にしよう、本気で世の中を良くしようと考えている人たちの考えだと伝えます。そうした人たちが投資家から資本を集め、周囲の人たちからも尊敬を集めるのだそうです。そのような尊敬を集める人たちの仕事ぶりとは、ワークがライフであり、ライフがワークであり、そこにバランスという概念はないということでした。つまり、冒頭で紹介した澤さんの年間287

回もの講演は、果たしてワークとライフのバランスの取れていないブラックなものなのか？という問いにつながっていきます。澤さんはここでワークとライフの境界が薄い、ある種の自己実現といった形に近い働き方ができているということでした。

及川さんの ワークライフバランス考察

続いて、これから社会人になっていく学生さんを交えて、澤さんと及川卓也さんらによるパネルディスカッションが行われました。及川さんはHack For Japanスタッフでもあり、過去に外資系のインターネット企業に勤め、スタートアップへの転職、そして現在は個人事業主として、さまざまな企業と仕事をともにしています。

ディスカッションに先立ち、ワークライフバランスとはどういったものなのか、ご自身の経験もふまえた考えを及川さんに講演^{注2}していただきました(写真2)。

そもそもワークライフバランスという言葉に対して違和感を感じているという及川さんは、今の「ワークとライフのバランスを取る」という考え方は、ワークとライフが対立した関係にあるという前提のもと成り立っていると考察されていました。先ほどの澤さんのワークライフバランスの話にもつながってきますが、近年のワーク(仕事)が生活のためだけではないという考え方が広がる中で、西洋の宗教観にある労働は苦役という考え方に縛られ、本来、考えるべき構造を正しくとらえられていないのではないか？という問いかけを参加者に投げかけま

注2 <https://www.slideshare.net/takoratta/ss-136706315>

▼写真2 ワークライフバランスの考察を講演する及川さん



す。ライフ(人生)はワーク(仕事)とプライベートによって構成されており、バランスを考えるのであれば、このワークとプライベートの比率を考えるべきではないか、ということでした。

一方で、及川さんは近年のテクノロジーの発達により、どこでも働ける環境が整いつつある現状からワークとプライベートの境界線自体も薄まりつつあり、バランスを取るということ自体が時代にそぐわないものになっていると指摘。ワークライフバランスという表現よりも、仕事も私生活もそれぞれ充実させることで、相互に好影響を及ぼす「ワークライフハーモニー」という表現のほうがより良いのではないかと訴えました。

その一例として、過去に勤めた大企業の中でハードワーカーである部下の、遅くまで働きながらも私生活ではしっかり遊ぶという姿勢から、ある期間のトータルで見たときに仕事の量も私生活を楽しむ量も、全体でバランスが取れていれば、細かく考えなくても良いのではないかと、といった事例も紹介いただきました。もちろん、前提として身体が悲鳴をあげるほどの労働は身体的にも精神的にもまずいものなので、無理のない範囲で留めましょうというお話でした。

経営視点で考える生産性とは

また、及川さんは労働がもたらすアウトプットは、それを求める企業を経営する立場から見ると整理しやすいことから、労働のアウトプット(すなわち業績)を構成する要素を細かく分解していくことで、その中で何が最も重要なものなのかを考察していました。業績は生産性とかけた時間で構成されますが、働き方改革の流れで労働に割ける時間は減る一方、高い成果を求められる構造になってきていると言います。また、生産性を構成する要素のうち、今後自動化が進む単純作業ではなく、創造性のある作業の重要性が高まっていくことから、創造性を生む集中力、すなわち、やる気を高めることの大切さを説かれていました。

そして、やる気を高めるためには直接的な報酬な

どによる外的動機づけ、また、本人の興味関心に基づく内的動機づけのいずれも大切だと及川さんは主張します。働き方改革で労働時間が削減されるなか、生産性が低いとされる日本においては本人の内的動機づけに頼るばかりではなく、能力に応じた適切な報酬が与えられる評価制度などにより、外的動機づけも強化しなければ、優秀で若い労働者が昼夜問わず働いて高い生産性を出す中国には太刀打ちできないと、日本の政策にも警鐘を鳴らしました。

その後、澤さん、及川さんの講演内容をもとに参加者の間でさまざまな意見交換がなされました。その中でも、福島原発の避難区域から郡山に移ってきた学生によるITの力への感謝や、また、福島で人を惹き付けるモノづくりをしたいと訴え、澤さんや及川さんからアドバイスを受ける学生など、福島の若い人たちにとっても得るものが大きい勉強会になったように感じました(写真3)。

まとめ

東日本大震災から8年目を迎えました。この数年、エフスタ!!さんと我々の関わりの中で、当初の原発問題の現状の話から、徐々に未来の話が増えてきました。そして、これからの日本や福島を支える若者たちの姿も増えてきました。冒頭で紹介させていただいたエフスタ!!の描く理念が、今回も徐々に結実しているとエフスタ!!TOKYOの場で感じることができました。こうして福島を飛び出して大きく活躍する人たちとともに、これから長い時間をかけて復興していく福島をみなさんもどうぞ応援してください。SD

▼写真3 エフスタ!!TOKYO参加者の集合写真

